

子育てをめぐる生活空間の諸問題を考える —空間が強いる社会的規範という角度から—

Considering Problems of Living Space in the Context of Child Rearing: From the Perspective of Space as a Forced Social Norm

浦田（東方） 沙由理

URATA(TOHO), Sayuri

はじめに

近代化，都市化の進行とともに，生活空間から「危ない，うるさい，汚い，臭い，遅い」といった側面が排除されてきた。これらは安全で衛生的で便利で平穏な暮らしを人びとにもたらした一方で，そのことによって自由を制限される者やその場に居合わせることが嫌がられる者を生み出した。それは乳幼児・子ども・血気盛んな若者・障がい者・病人・老人あるいはホームレスなどである。本報告は，自身が子育て中に直面した困惑や辛さの原因は何かを追求したいという思いが動機となっている。

いつの時代も子育ては手がかかっただろう。しかし子どもの泣き声やいたずらに気を遣い，遊び場・遊び方に縛られ，子どもの自由な活動がこんなにも嫌がられる時代はなかったのではないだろうか⁽¹⁾。機能的に分化が進んだ現代社会特有の生活空間において，その場に適した振る舞いを子どもに要求することは親にとっても子どもにとってもストレスに感じられる。子どもによって行動を制限させられること，子どもを大人の社会の論理に従わせることが難しいこと，大人は社会的規範に縛られていることなどが，子どもを育て辛い・可愛くないと思わせる一因になってはいないだろうか。悪いことに，子どもを大人の意図に従わせようとするならば，そこで待

っているのは支配・管理・服従である。それは子ども期の剥奪を意味している。

本論では都市における子育ての困難さを現代社会特有の生活空間という空間の問題と，その空間が強いる社会的規範という二つの側面から論じることで，現代に特有の子育ての問題を考えてみようとするものである。空間からアプローチする理由は，人間の行動様式は環境によって規定される一面があると考えられるからであり，それがストレスを誘発させる客観的土台となっているのではないかという視点によるものである。また本論では，ある行動様式を強いる環境がその空間特有の社会規範を醸成するだけでなく，孤立を助長しているのではないかという点も指摘したい。具体的にはそれは「人の迷惑にならないようにしなければならない」という行動原理・行動心理である。これは一見すると当然のように思われるかもしれないが，実は「人と関わらないようにする」行動原理・行動心理でもある。それゆえ自立という名の下に孤立を助長する一因となっていないだろうか⁽²⁾。

このような行動原理・行動心理を環境の側，特に空間が強いていることを明らかにすること，それが現代に特有の子育ての困難さや辛さを生み出していることを明らかにすることが本論の目的である。

第1節では現代の都市空間の機能的な特徴をあげ、第2節ではその都市空間の特徴が家事と育児の分断や子どもの身体的接触の排除をもたらしていることを指摘し、第3節ではそれらが人びとの孤立に波及していることを指摘する。

第1節 都市空間の特徴

まず都市空間とはどのような場所なのだろうか。それは空間（部屋・施設・広場）ごとに機能や役割や管理者がはっきりと決められていることと、それらが door to door でつながれていることの二点であると本論では定義する。そもそも近代都市は中央機能（官僚機構）と経済（生産・流通・貿易）を柱とし、そのための機能性・効率性・利便性を追求した分業化が押し進められ、またそれらに従事する大量の労働者を受け入れる中で発展してきた。現在はその延長にありつつも、都市再生の名の下に都市の内部が開発の対象となっており、新たな様相を呈している⁽³⁾。

土木事業を含めて空間の設計・再編がなされる際、それらはあるコンセプトにのっとって設計される。桑子敏雄はそういったコンセプトによって設計された空間をコンセプト化された空間と呼び、そのような空間——価値が一元化された空間——では本来空間のもっていた多様性や豊かさは排除されるだけでなく、その概念風景にふさわしい振る舞いと身体をもつように要求されると指摘している⁽⁴⁾。その結果、コンセプト化された空間の中では——それが概念による空間の囲い込みであるがゆえに——「いつでも・誰でも」という公共的性格が失われてしまうという。このことが空間利用者に対してある種の制約や空間からの排除を生み出していると考えられる⁽⁵⁾。

一方、都市の変遷に関する文献をめぐってみると、

近代都市の発達には鉄道をはじめとする交通網の開発・整備と一体をなしていることがわかる⁽⁶⁾。大都市圏の誕生である。その特徴は職住分離の生活形態ということができ、特に居住地の郊外化は過密化・肥大化する人口の受け皿の役割を果たし、家族持ちのいわゆるサラリーマン世帯がその多くを占めている。

都市に関わって生活する人びとの行動に注目した場合、それらの人の空間利用の特徴が door to door である。これは本来流通の合理化を示す言葉であったと思われるが、今や出発地（主に家）から目的地（主に仕事場）に要する移動時間を指す際にも使われている。そこでの行動原理・行動心理はいかに早く楽に目的地に着けるかであり、人の流れ・交通機関の流れを妨げないことが社会的規範となっている。加えるならば、そのような人びとの行動様式に合わせて店舗の配置などが設計される。つまり、都市へと通勤する労働者（あるいは企業活動）にとって非常に合理的な設計となっている。そのような空間が、仕事に従事していない非生産者にとってどのような空間に映るのだろうか。

非生産者にとっても都市空間の利用の際の行動の特徴は door to door である。子育て中の母親に限定してみれば、家から door to door で向かう先は、スーパー・デパート・コンビニ・薬局・市役所・病院・保健センター・図書館・児童館・保育園・公園・動物園・水族館・レジャー施設などがあげられる。しかし、これらの場所に到着するまでに大変な苦労と緊張を強いられる。人の往来を妨げないようにし、自動化されたドアや乗物の乗り降りに注意を払い、公共交通機関の利用の際は人の迷惑を気にする。そもそもこれらの施設は隣接されていない——分断されている——。また目的地に着いたからとい

って、それらの場所でも子どもを放任させて遊ばせることはできない。なぜならそれらの場所は特定のコンセプトをもっており、それゆえその場に適した振る舞いをしなければならないからだ。交通費と移動時間、また移動の労力を考えるとあまり遠いところにも行けず、日々同じような場所を転々とする。そのため今日はどこに子どもを連れて行こうか、というのが子育て中の悩みの種となる。中にはわざわざ外に行かずに家に引きこもりがちになる親子もいるだろう。

これらの分断化された生活空間が、都市における子育てを困難にしたのではないだろうか。それを家事と育児の分断という言葉で整理し、次にこの点を見ていきたい。

第2節

家事と育児の分断と身体的接触の排除なぜ都市空間は子どもを育て辛いと感じる空間なのだろうか。それを第1節ではコンセプト化された空間と door to door の行動様式という都市空間の特徴からみてきた。そしてそれが子育て世代にとっては家事と育児の分断をももたらしているのではないかということを目指したが、ここではその具体的な内容についてみていきたい。

まず仕事と家事の分断とそれに伴う女性の抑圧を痛切に——近代家族のイデオロギーとして——糾弾してきた戦後の日本のフェミニストたちを参考にする。その中でも、フェミニスト地理学という分野から発せられた「ジェンダー化された空間」という提起は、空間の分離が家庭の役割を固定化させる働きをしていると指摘しており、本論との関係において非常に興味深い。

影山穂波は、従来のフェミニストたちが指摘して

きた生産労働と再生産労働という活動の分離に加え、都市の郊外化による職（仕事）と住（家事）という空間の分離に注目して論じている。そして分離された再生産空間こそが性別役割分業や家父長的規範を規定・温存してきたとみる。

「日々の糧を得るために働き、その疲れを癒すという日常生活、すなわち生産労働の行われる空間と再生産労働が行われる空間が分離され、またジェンダー化されて、都市は成立していった。都市は、都市生活者を一定の型にはめる役割を果たしてきたのである。」（影山 2004：26）

この都市生活者を一定の型にはめさせる空間構造が問題なのであり、そのような空間構造自体が人びとの振る舞い（ジェンダー意識）を再生産させてきたともいえるだろう。残念ながら、影山には育児への言及はなく、そういった空間が子育てや子どもに与える影響については書かれていない。そこでここでは再生産活動を家事と育児の二つにわけ、都市空間はその二つを分断していることに言及したい。

家事と育児というこの二つは、その多くが重なる領域であると思われるかもしれない。確かに温かい食事を用意し清潔な居住環境を整えることは、帰宅した夫や同居する家族だけではなく子どもにとっても重要な事柄である。しかし子どもにとってみれば、それと同じかそれ以上に遊びが生活の中心を占める。室内遊びだけでは感覚・感性や運動能力、想像力などを育てるには十分でないし、何より家族以外との接点や人間関係に乏しくなる。したがって子育てにおいて十分な外遊び（場）を確保することは重要な問題である。

先にあげた母子の行き先の羅列を参考にすれば、遊び場として考えられるのは児童館・保育園・公園・動物園・水族館・レジャー施設あるいは図書

館である。しかし先にみた通り、これらの場所で自由に好き勝手遊ばせることはできない上、子どもの遊びにとって不十分と思われる部分がある。それは、子どもの遊びが身体的接触に基づいた体験型破壊活動（試行錯誤）であることに関係がある。

桑子は、コンセプト化された空間が生み出された結果失われたのは、体験の多様性や創造性の源泉としてあった身体空間であるという⁽⁷⁾。なぜなら概念化とはしばしば視覚にもとづいてなされており、感性に起源をもつものではないからであるという⁽⁸⁾。つまり概念化された空間の中では、子どもの遊びの特色である身体的接触に基づいた体験型破壊活動は規制・制限され、管理者や第三者からは不適切な行為としてみなされるのである。これでは子どもは自由に遊べないし、親も遊ばせられないだろう。

一方で子どもを外や子どもの遊び場として指定されている場所に連れて行くと今度は家の中で行う家事ができない。あるいは家事をまかなうために行かなければならない場所もある。スーパーやデパートなどの食品売り場や衣料品売り場、ホームセンター・ドラッグストアなどの日用品売り場である。店舗内は子どもの遊び場ではない上に、商品を遊び道具にしてしまうと弁償のリスクを負う。しかし家事労働が商品に依存している以上、買い物に行かない訳にはいかない。このような状況をみれば、家事と育児は空間的に分断されているといえるだろう。

さらに door to door の行動様式も子どもの身体的接触を分断するのに一役買っている。子どもの側からすれば、日々の行動は家を拠点としたいつもの道を中心に、成長とともに外に広がっていくと考えられるが、その子どもの行動の特徴は道草と呼ばれるような探索活動である⁽⁹⁾。door to door という行動様式はこのような子ども特有の探索活動の機会を

削いでいる。このような行動様式は核家族化の進行や庭・空地の不在だけでなく、自動車の往来などで家の周りや道端で安心して安全に子どもを遊ばせることができなくなったこととも関係しており、これらが複合的に絡み合って、都市における子育ての困難の一つとなっているのではないだろうか⁽¹⁰⁾。

さらに言及せねばならないのは、生活スタイル・行動様式の個人主義化についてである。なぜならこれが便利で自由な生活を象徴している反面、孤立化・無縁化・自己責任という現代特有の問題を招いているとも思われるからだ。それが「人の迷惑にならないようにしなければならない」という行動原理・行動心理である。次にこの点についてみていきたい。

第3節 自立と孤立について

私たちは都市空間において、「人の迷惑にならないようにしなければならない」という行動原理・行動心理を有している。これは一見すると公共空間における正当な社会的規範のようにみえるが、同時に極めて個人主義的側面をもっている。すなわち、「人の迷惑にならないければ何をやってもよい」「迷惑をかけないから干渉するな」という側面である。他人に迷惑をかけずに自分一人の力で生きることができるのが立派な大人であり、またそれが個人の自立（独立）としてみなされてきた。その結果蔓延しているのが自己責任論である⁽¹¹⁾。この自己責任論の帰結が、最近注目された「助けを求めない」人の増加である。

NHK のクローズアップ現代で放映され、文庫化もされた『助けてと言えない 孤立する三十代』では、「何が悪いって、自分が悪い」（第三章のタイトル）という自己責任の強さと、一方でホームレスに見ら

れたくないという自尊心の強さが特徴として見い出される。それゆえ誰かの助けが必要な境遇に陥っているのに、そのような支援の申し出を断るのである。申し出を断るだけでなく、自分から声を出そうとしない。つまり、人との関わりや積極的介入を避けるような行動をとるのである。これは他人の不干渉に基づいた自由の確保といえるかもしれないが、このことが問題を個人の内部で抱え込ませ、問題をみえにくくさせている⁽¹²⁾。実はそこにも都市空間特有の状況が作用していると考えられる。

近代都市は物だけではなく人の交通も激化させた。菱山宏輔は「社会自体がボーダレス化することによって、犯罪の大小を問わず、いつ何時でも、あらゆるもの・こと・場所が機会となって、どんな人でも犯罪にかかわる／巻き込まれるかもしれないという不安」(菱山 2013: 49)が生じていると指摘する。それゆえ自己を守るために私的空間という領域の確保(プライバシーや個人情報の保護)や犯罪を防止するための監視が常態化するという。この見知らぬ不特定多数の人びとが行き交う空間——都市空間——でトラブルに巻き込まれないためには、極力他人と関わらないようにする行動心理が生まれても不思議はない。すなわち自己防衛としての個人主義(孤立)を選択しているのである⁽¹³⁾。

また先に指摘した都市生活者を一定の型にはめる空間構造は、それ自体が公の場で声を出すことを奪っているともいえるだろう。子育てに関していえば、子育てに関する悩みや相談は、保健センター、育児・児童相談所、関係する福祉施設・行政機関で、というのがそれである。子育ての際に気になることは病気以外では些細なことも多いため、わざわざ専門家(と呼ばれるような人)の所に出向いて相談する必要を感じにくく、相談相手に指導という意識が

強く感じられると小さな悩みは口に出しづらい⁽¹⁴⁾。身近で気軽にプライベートを吐露できる人間関係の希薄さも根底にはあるだろうが、プライベートな発言を抑制する空間構造にも視点を当てるべきだろう。

では何からこの個人主義的孤立という問題にメスをいければよいのだろうか。

これまでの経緯から、現代社会の生活空間では援助を必要としていると思われる人でも、他者からの干渉——支援-被支援という関係——は拒否することが予想される。同時に相手の自尊心を傷つけないよう配慮が必要だ。阿部彩はホームレスの人たちと接する中で、人にとって「つながり」「役割」「居場所」というものが、いかに人間の尊厳を保つうえで不可欠なものであるのかということをお教えられたという(阿部 2011)が、この「つながり」「役割」「居場所」という三点に着目してみると、空間が提供するものはまず「居場所」ではないかと思われる。しかし都市空間において本当に重要なのは「役割」から解放されていられる「居場所」ではないだろうか。なぜなら都市空間においては「役割」がないことは自己の存在を「不要」とみなしかねない一方で、「役割」がある場合、その「役割」に過剰に縛られてしまうからだ。

桑子は次のようにいう。

「わたしの考えでは、境界空間こそ人間が自己の存在の意味をみずから探り、また自己自身に与える空間である。そこでひとは概念区間の緊張から解放されることで、自己の存在のあいまいさを取り戻すのである。人間があいまいな存在であるということは、人間が公共的な空間と私的な空間を往来する存在だということである。そのあいまいさが存在するからこそ、自己への探究が可能なのであり、そのような区間でのひとときが与えられ、強制された意味

から自己をゆるめることができる。この『ゆるめ』こそ『くつろぎ』であろう。」(桑子 2005: 63)

この「ゆるめ」や「くつろぎ」ができる場所としての「役割」を担わされたのが「家庭」であった。しかしそれが今度は女性の「ゆるめ」や「くつろぎ」の機会を奪ってしまった。その結果、家事・育児・介護に従事する女性が様々な心理的トラブルを抱え込んでしまうとノイローゼやうつ病になってしまい、ネグレクト（育児放棄）や虐待・暴力を引き起こし、頑張っている自分に対し過度の自己肯定感や個人主義的価値観を前面に出すとモンスターマザーと呼ばれるようになるのではないだろうか⁽¹⁵⁾。これらは推測にすぎないが、大いに考えるべき事柄であるように思われる。付け加えるならば、育児・介護など身内の世話に携わっている人が外と関わりをもたずひきこもっている状態、またそれを助長するような社会状況が、問題を悪化させている一因ではないかと指摘したい。

家事・育児に限らず、人間の再生産活動は人間が生きていくために必要不可欠なものである。というよりはむしろ、再生産活動を維持することが本来は生活の中心にあったといえよう。しかし近代以降その再生産活動が生活（仕事）から切り離され、プライベートな空間（家庭）の女性が担う固有の役割へとおいやられ、またその意義も賃労働の下に置かれてしまったことはフェミニズムが明らかにしてきた事である。この問題の解決方法として私は、再生産労働という「役割からの解放」（外部化）を目指すというあり方ではなく、家庭の中に押し込められた再生産活動の「共有化」（オープン化やネットワークの再構築）が重要ではないかと指摘したい。そのためには女性の行っていた——無価値・不必要だと思われていた——活動にもっと焦点があてて研究が

なされ、それらがコミュニティの形成といかに関連していたのかを明らかにする必要があるだろう⁽¹⁶⁾。

おわりに

子育てに限らず、現代の都市空間を居づらい、あるいは生きにくいと感じている人は多いのではないだろうか。都市の発展・近代化は、一見安全で衛生的で便利で平穏な暮らしを実現したかにみえて、実は心理的には社会的規範や場に適した役割を強固に強いるものとなっている。また個人の自己決定に基づく自由な暮らしは一方でプライバシーや防犯意識を含んだ自己責任を暗黙の了解としている。このような結果、問題として表面化したのが現代社会に特有の無縁社会という状況ではないだろうか。その対応策としてのコミュニティの必要性や地域の再建が指摘されるが、しかし今や、子ども時代から人と交わる基礎経験を育む場が喪失・排除されている。このことが問題を深刻化させる土壌となっているのではないかと本論では指摘したい⁽¹⁷⁾。

コミュニティの再建について主観的な主張を述べることを許されるのであれば、コミュニティの基盤、もっといえば共同体内の人間的なネットワークや情報網を提供していたのは女性だったのではないかということである。世間話、噂話、井戸端会議、悩み相談などで、時には口を滑らせて、閉鎖的な家の中の事情をオープンにしてきたのは女性のおしゃべりではなかろうか。家の中の事情を外に曝されるのは男性にとって面白くないかもしれないが、おしゃべりによる生活の知恵や情報の交換・共有あるいは精神的交流などが相互扶助・共助の精神を深める一因ではなかったとは誰も言えないだろう。「勝手知ったる他人の家」とまではいかななくても、女性型のコミュニティ論が出てきてもいいように思われる。

快適で便利で自由な暮らしは魅力的ではあるが、生きにくい、生きたくないと思ってしまう社会に生きなければならないということは辛いことである。少しでも子どもの未来を考え育む社会となってほしい。

注

(1)最近は子どもの公園での遊び声や遊ぶ音が騒音認定され、住宅街にある学校や幼稚園・保育園には苦情が寄せられるというような事態が起きている。

(2)この「人の迷惑にならないようにしなければならぬ」という行動原理・行動心理は、子育てをしていて一番身に染みて感じるものである。しかしこの行動原理・行動心理は、子連れである自ら（子どもを含め）を社会的に迷惑な存在だとみなすことへとつながっている。妊娠・出産を経て子育てにいそんでいる中、社会的に引け目を感じなければいけないという状況は、子どもを育てる身として非常に悲しいものである。

(3)平山洋介は次のようにいう。「伝統的な前線は都市の外側に向かって水平方向に広がっていた。農地の宅地転換が進み、道路基盤が延び、郊外住宅地が拡大した。しかし、市街地の膨張は終了した。開発の新しい力は都市の内側とその空中を新たなフロンティアとみなした。市街地は再び前線化し、その改造と垂直方向への開発が始まった。超高層のオフィスビルが林立し、大規模なコンプレックスが増加した。新しい建築の多くはメタルとガラスを多用し、光線を反射し輝いている。タワーマンションは上方に向かって伸び、住む場所を上空に押し上げた。ベイエリアでは開発事業が続き、オフィス、消費施設、集合住宅、アミューズメント施設など、多彩な建築物が建った。」（平山 2006 : 11）そしてこのような

開発地区を“ホットスポット”と呼び、“ホットスポット”の住宅地は都市の変動に対して自らを閉ざし、セキュリティ、デザイン、価格などの極端さともなった防御姿勢の「飛び地」を形成した（同上 : 148）と指摘する。一方で橋本健二は新中間層の流入にともなう富裕地域化とそれに対応した再開発を「ジェントリフィケーション」と呼んでいる（橋本 2011）。両者において興味深いのが、これらが空間の再編だけでなく経済的な差や身分的な差による地元住民との分断を反映しているという点である。

(4)桑子の言葉でいえばそれは「風景の概念化は空間に対応した身体概念化も強要する」（桑子 2005 : 58）ということだが、そこには空間と人間の行為が全く無関係のものとして存在しているのではなく、深い連関・応答関係が存在するという桑子の思想がある。

(5)その具体的な事例として、親水護岸や子どもの遊ばない公園などが挙げられている。親水護岸は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトに基づいて設計されるとそれ以外の行為——川に入る、虫や魚を獲る、水を堰き止めるなど——をする可能性は排除され、子どもの遊び場として設定された公園は、それが大人の考えた健全で安全な子どもの遊びを前提として設計されているがゆえに、それ以外の遊び——創造性や多様性をはらんだ遊び——は生まれにくい。そもそも「子どもの」という言葉が冠されている時点で、それ以外の人の利用は慎まなければならないように感じられる。

(6)水内俊雄・加藤政洋・大城直樹（2008）参考。

(7)桑子は感性によって把握される身体空間を重視しており、それによって形成される自己の履歴と、人びとの営みや多様な歴史が刻印された空間の履歴

の必要性を説く。なぜならそれらが人生の豊かさや心の豊かさを生み出していたと考えるからだ。

(8)解剖学者の養老孟司は現代社会における人間の身体観が「自然の身体」とは別に脳（概念）によって作りだされた「人工の身体」への二分化の傾向があることを指摘し、現代の脳（概念）に基づいた社会を脳化社会と呼んでいる（養老2004など）。これは感覚よりも概念の優位によって物事が語られているので、桑子の指摘と類似性をもつように思われる。

(9)子どもは歩きはじめると、変なものを見つけてはいじったりふんだりし、路地や狭い場所に入ってみたり物陰に隠れてみたり高いところに登ってみたりし、犬や猫や鳥にちょっかいを出したり虫を捕まえたりし、水や砂の流れを飽きずに見つめていたり、草花や土の匂いを嗅いでみたりする。仙田満は子どもの遊び空間の原空間として、自然スペース、オープンスペース、道スペース、アナーキースペース、アジトスペース、遊具スペースの6つを挙げているが、人間の行動は歩行が中心であることを考えると、道というものの経験は遊び空間以外で意味をもっているようにも思われる。

(10)逆にいえば、家事と育児が同時にできる空間とはどこだったのだろうか。その原空間は水場だったのではないだろうか。炊事するにも洗濯するにも風呂をわかつのにも水が必要である。特に洗濯には時間がかかるため、子どもを一緒に連れて来たり子どもに手伝ってもらったりしたと思われる。人が集まれば子どもも集まり、中には面倒見のいい子もいるだろう。何より大事なことは井戸端会議という言葉にみられるように、そこで女同士の交流があったことだ。何気ない会話の中で生活の知恵や近隣の情報交換ができ、ちょっとした悩みなどはここで解消でき

る。そういった意味で共同の水場の喪失は女性のインボランタリーな交流（コミュニティ）の機会の喪失とも言えるだろう。

(11)ここでいう自己責任論とは、社会の不備・負担を個人に転嫁するような社会構造の問題ではなく、自己責任を内面化し当然視している個人の心理のことである。

(12)児童虐待の問題が指摘されているにも関わらず、この声を出さないという事が問題を危機的状況に陥るまで悪化させている要因にはなっていないだろうか。実際、児童虐待による死亡事件や子どもの餓死といった問題の表面化後、行政やNPOなどによる支援が強化されてきたが、それとは裏腹にそういった支援や制度を頼る人は少ないという。川崎二三彦は児童虐待を生じさせている4つの要因（子ども時代の愛情不足、生活ストレス、社会的孤立、意に沿わない子）に加えて、「…むしろ、最も強く援助を必要とする人が、最も強く援助を拒絶するということも、決して珍しいことではないのである」（川崎2006：90）と指摘している。

(13)石川結貴はプライバシー意識の高まりや個人情報に気を配るあまり、母親同士の人間関係はますます希薄になっていることや「横並び意識」が我先にと自分だけ特別という「競争意識」に変わったこと、そして人や社会を信じられない現実、一層の自己中心主義を招くことなどを指摘している（石川2008：5、212、216）。モンスターマザーはその思考の極端さ・過激さ・他者への攻撃性を特徴としているがそれらは個人主義という言葉だけでは説明できない。しかし、自己愛やプライドなどといったやっかいなものを含めた上での自己防衛という形ならば納得がいく。

(14)しかしその些細なことは気にかかってしまうこ

とは事実なので、その簡単な解決方法（相談方法）としてインターネットによる育児相談や関連の掲示板が利用される。そこで求められているのは専門的・医学的に正確な回答よりもむしろそれが「みんな感じている」ことであり「大丈夫である」ということの確認である。一方でインターネットに意見を求めることが結果として身近な人間関係の希薄化を助長しているとも考えられる。

(15)これらはノンフィクション作家の石川結貴や杉山春などの書籍を読んだ後の私の見解である（石川 2007；2011；2014，杉山 2007，朝日新聞大阪本社編集局 2012）。

(16)これに関しては(10)で指摘したように水場のような場所やそこで行われていた井戸端会議のような女性のおしゃべりの特徴を明らかにする必要がある。素案を示しておけばそれは、女性のおしゃべりは面と向かって何か意味や目的をもって話すのではなく、作業の片手間にぼつぼつと意識にのぼった話題を口に出すことが多い。作業をしながら、という点が実は重要である。若手シンポジウムの準備会でも草むしりや共同調理の合間に交わされる会話が心理的な面で何らかのポジティブな作用をもたらしているのではないかという意見の交換的一幕があった。

(17)実際、相対的貧困率やホームレス・ワーキングプア・派遣労働者などの人びとが直面している社会的排除が取り沙汰されるとともに、それらが次の世代に及ぼす負の連鎖として子どもの貧困や子どもの無縁社会が語られるようになってきた（阿部 2008；石川 2011）。これらは今後の社会にとって非常に重要な問題だろう。

参考文献

朝日新聞大阪本社編集局（2012）『ルポ 児童虐待』

朝日新聞出版

阿部彩（2008）『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書

阿部彩（2011）『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社現代新書

石川結貴（2007）『モンスターマザー 世界は「わたし」でまわっている』光文社

石川結貴（2011）『ルポ 子どもの無縁社会』中央公論新社

石川結貴（2014）『ルポ 妻が心を病みました』ポプラ社

NHK スペシャル取材班（2012）『無縁社会』文藝春秋

NHK クローズアップ現代取材班（2013）『助けてと言えない 孤立する三十代』文藝春秋

影山穂波（2004）『都市空間とジェンダー』古今書院

川崎二三彦（2006）『児童虐待』岩波新書

桑子敏雄（1999）『環境の哲学』講談社学芸文庫

桑子敏雄（2001）『感性の哲学』日本放送出版協会

桑子敏雄（2005）『風景の中の環境哲学』東京大学出版会

沢山美果子・岩上真珠・立山徳子・赤川学・岩本通弥（2007）『「家族」はどこへいく』青弓社

杉山春（2007）『ネグレクト—育児放棄 真奈ちゃん はなぜ死んだか』小学館

仙田満（1992）『子どもと遊び』岩波新書

橋本健二（2011）『階級都市—格差が街を侵食する』ちくま新書

平山洋介（2006）『東京の果てに』NTT出版

堀切直人（2009）『原っぱが消えた—遊ぶ子供たちの戦後史』晶文社

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹（2008）『モダン都

市の系譜—地図から読み解く社会と空間』ナカニ
シヤ出版

菱山宏輔（2013）「第3章 不安の深層から一見えない
犯罪の裏側を探る」吉原直樹・近森高明編集
『都市のリアル』有斐閣

養老孟司（2004）『日本人の身体観』日本経済新聞
社

浦田（東方） 沙由理
（立教女学院短期大学非常勤講師）